

The NEWS 東京農大

2024年(令和6年)4月号
第100号



東京農業大学
TOKYO UNIVERSITY OF
AGRICULTURE 1891

「総合農学」を推進する

- 世田谷キャンパス 大学本部
- 大学院・応用生物科学部
- 生命科学部・地域環境科学部
- 国際食料情報学部
- 厚木キャンパス
- 大学院・農学部
- 北海道オホーツクキャンパス
- 大学院・生物産業学部

4月・7月・12月 発行
編集 東京農業大学企画広報室
〒156-8502
東京都世田谷区桜丘 1-1-1
<https://www.nodai.ac.jp/>



HEADLINE

- 副学長あいさつ／学部長あいさつ／能登復興支援の輪…………… 2
- 学長の愛したフィールドの旅「オホーツク臨海研究センター」篇／東京農大の研究者たち・小塩海平教授／ニュース&トピックス…………… 3
- 東京農大の卒業生たち／SDGsコンテスト受賞作品決まる／きのこ図鑑／農友会の活動(競技スキー部・男子ラクロス部)…………… 4

TREND SNS 随時更新中

Facebook LINE YouTube BLOG

入学おめでとう

「総合農学」

その教育と研究を 実践する世界へようこそ



東京農業大学 学長
EGUCHI Fumio 江口 文陽

新入生の皆さんへご入学おめでとうございます。

東京農業大学の教職員を代表して心よりお祝い申し上げます。

本学は1891年に徳川育英会を母体として日本で初めて設立された私立の農学校です。建学の祖榎本武揚先生は、農学教育とは、理論と実践が備わって真の本物となり、産学との実りある連携が国や人への幸福を導くことを提唱されました。初代学長横井時敬先

生の名言「稲のことは稲に聞け、農業のことは農民に聞け」は、榎本学祖の提唱を實踐し、行動によって発せられた「農学の源」です。

本学は、農学領域の全て、すなわち「総合農学」を学び、研究のできる大学なのです。多くの機器を備えた実験・研究施設とともに日本各地に設置されたフィールドの環境は、他大学にはない「誇るべき宝」です。

特にフィールド施設を核にして、学生と教職員が「フィールドを知り、フィールドに学び、フィールドと暮らす」ことで多くの新発見を手に入

入れることでしょう。本学での学びは、きつと令和時代に世界を牽引する人材育成に繋がるものとして確信しています。

世界のあらゆる自然環境の中では、想像を超えた現象が起きます。自然のすばらしさを正確にキャッチし、共生していく知識を養い、行動できる人間力を備えてもらいたいと思います。本学に入学した皆さんは農大同志として力を合わせて「夢の実現」に向かって躍動してください。そのためには、コミュニケーション能力を高めることです。その一歩は、「あいさつ」ではないでし

ょうか。「こんにちは」「さようなら」「ありがとう」などの誰もが知っている言葉を相手に聞かせるように発音していきませんか。きつと皆さんには良いことが訪れるでしょう。

本学教職員、卒業生さらには本学と深い絆で結ばれた多くの人々が皆さんを温かく見守っています。大学の持つ知的資源やフィールドを活用して五感で学び、得られた情報を正確に受け取り大きく成長することを願います。「輝かしき未来」に向かって学び始める皆さんを心から応援いたします。

うか。「こんにちは」「さようなら」「ありがとう」などの誰もが知っている言葉を相手に聞かせるように発音していきませんか。きつと皆さんには良いことが訪れるでしょう。



世田谷キャンパスに「経堂の森」(仮称) オープン

昨年6月から整備していた新たなランドスケープ「経堂の森」(仮称)が完成し、1月10日から一般開放された。



「農ある風景」段々畑

「総合農学」推進の象徴

オープンした「経堂の森」(仮称)は、経堂南横、国際センター北側に位置し、里山を思い起こさせる。石組みがあり、緩やかな傾斜のある地形をいかした段々畑、中央には「農ある風景」がある。「里山のテラス」がある。テラスから周りを見ると「農ある風景」が広がり、そこで学生が語り、総合農学に関する学びが広がっていくというコンセプトで造られた。段々畑には、学生や教員が作物

を植える等、実学教育の場として活用が期待される。世田谷キャンパスにできた里山の景は、「総合農学」を推進する東京農大の指針を象徴した一つである。

計画・設計は造園科学科ランドスケープデザイン・情報学研究室が協力した。【住友富美】

東京農大ガストロノミーを体感せよ!

ガストロノミーとは、一般的には「食事と文化の関係を考察すること、食文化に関する総合的学問体系」などと定義される。東京農大版として提

唱する「東京農大ガストロノミー」は、本学が「関係地域全体の発展」を推進すべくキャンパス・農場・周辺地域や関連団体など縁ある食材や調理法

により生まれる、東京農大でしか味わえない「食の実学」となる。網走産のホタテ、世田谷キャンパスで採れたきのこ、厚木の農場のさつまいもなど、旬の厳選食材が期間限定で学食に登場する機会を楽しみながら、さらなる農学への探究に活かしてもらいたい。



厚木キャンパスでは朝食企画も実施



網走産のホタテを使用したホタテ・イクラ丼(上)と炙りホタテませそば(下) 【寺谷広介】

4月から始動 キャンパスサポーター制度

世田谷キャンパスでは、2024年度からキャンパスサポーター制度という新たな学生支援プログラムがスタートする。このプログラムは、学生同士の助け合いと学び合いを大切に、教職員と学生が協働でキャンパスの一体感を高めることを目的とする。サポーターたちは事前研修を受講後、新入生向けの履修相談や障がい学生のサポートといった修学支援を行い、さらに農大生のキャンパスライフを豊かにするためのイベント等を企画していく。なお、厚木キャンパスと北海道



今年度のサポーターたち

事前研修の様子

オホーツクキャンパスは2025年度からスタート予定。【和田健嗣】

「令和6年能登半島地震」 能登復興支援の輪

映画「一献の系譜」
チャリティ上映会開催

300名以上の方が来場し、
上映会を通じた支援総額は
1,132,552円に



上映会開始前に黙祷



被害状況を説明する山本亮氏

1月28日、世田谷キャンパス百周年記念講堂にて、「令和6年能登半島地震復興支援を目的とした二献の系譜」チャリ

ティ上映会が、学生・教職員・卒業生ら有志による協力のもと開催された。上映会のあとには、本学卒業生の桐本瑛生さん(輪島キリモト)と山本亮さん(里山まるごとホテル代表取締役)か

ら地震発生時の状況や被害の大きさについての報告とワークショップが催され、復興に向けた支援について考える機会となった。今後もこのような支援の輪が広がることを願う。【榎本 弾】

ご入学おめでとうございませう。新入生の皆さんは、2024年度スタートの最新カリキュラムで学ぶ最初の農大生です。新カリキュラムでは、変遷する社会のニーズに合わせる農大ならではの講義・実験実習と専門分野を超えた特別なプログラムが組み込まれています。これらを楽しんで学び、課外活動等で人間力を養いつつ、あなたも是非「総合農学」を牽引していく一人になってください。

ご入学おめでとうございませう。本年度から新たに開講される『東京農業大学入門』は、本学の使命を理解し、「農のこころ」を育み、農学の総合大学の一員として学部・学科の専門分野を学ぶべく皆さんへの本学からのエールです。学長をはじめ3キャンパスの6学部長から本学の魅力、社会からの期待「重くも大しわれらが使命」を熱く語っていただきます。

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございませう。皆さんは人生100年時代の社会を生きていきます。これからが準備です。学び続けるための勉強、友人からの刺激様々な経験を積み、AIにはできない人間力を培い、農大生だからこその活躍するグローバルに活躍する人物になることを応援しています。今のワクワクする気持ちを忘れず、新しいことに挑戦していきましょう。

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございませう。皆さんのこの先に続く長い人生の中で、大学で過ごす4年間は大きな意味をもつだろうと思います。人生の道を選ぶうえで「行動と選択の自由」があることは幸せなことです。でも、そのためには自分で考え、決断する力が必要です。農大で過ごす4年間で、考える力、決断する力を養い、進むべき道を見つけてほしいと願っています。

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございませう。これからの4年間は皆さんにとって自分という人間の付加価値を高める時間です。「実学」を重んじる東京農大で、世界中から集まる仲間との出会いを大切に、大学生でしかできない経験をしてください。様々な学問に触れてください。そして未来の在りたい自分像の実現に向けて、チャレンジしてください。皆さんの可能性は無限大です。

農大で学ぶ「総合農学」を 新カリキュラムで

上原 万里子 副学長
UEHARA Mariko



新入生への『YELL』

桑山 岳人 副学長
KUWAYAMA Takehito



人生100年時代のための 大学4年間

矢嶋 俊介 副学長
YAJIMA Shunsuke



進むべき道みつけて

千葉 晋 副学長
CHIBA Susumu



様々な「一期一会」を大切に

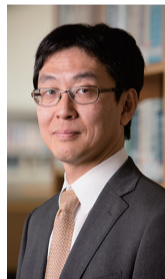
上岡 美保 副学長
KAMIOKA Miho



冬萌あるはUnseen Buds

農学部

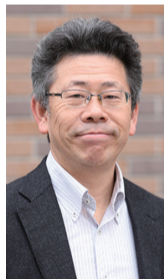
馬場 正 学部長



「本気」で学ぼう！
生命科学部

生命科学部

坂田 洋一 学部長



雪の下でまさに萌え出でんとする草の芽のことを冬萌(ふゆもえ)といいます。英語にするとUnseen Buds(じょうか)皆さんの心と体には、た

くさんの冬萌が、時充ちて、来るべき日を待っています。烈しい雪の中には春のぬくもりが宿っていて、花は早くも咲き初めているのです。新入生の皆さんが、ひとつでも多くの冬萌を伸ばし、実をならすことを願っています。

ご入学をおめでとうございませう。応用生物科学部に入学の皆様には、社会で「食」にまつわる課題を解決ができる論理的思考を身に

応用生物科学部

山本 祐司 学部長



幅広興味を持って行動しよう
地域環境科学部

地域環境科学部

大林 宏也 学部長



ご入学おめでとうございませう。農大での学びは普通教室だけでなく実験実習室や屋外実習など、さらに、研究室活動もあり、いままでサポートします。

あたたかな食のチャレンジャーになれ

副学長あいさつ

学部長あいさつ

国際食料情報学部

高柳 長直 学部長



「日本の食料自給率は()%である」。みなさんは括弧の中に38という数値を入れられると思います。しかし、本当に38%でしょうか。今

生物産業学部

西野 康人 学部長



ご入学おめでとうございませう。北海道オホーツクキャンパスでの学びのスタートです。周りを見まわしてください。豊かな自然、われわれの「生

の源である農業、畜産業、水産業、実体験の場が広がっています。目を閉じ、思いっきり息を吸ってください。そして目を開け、ゆっくり景色をみてください。可能性の宝庫をみながら、これからの4年間を想像してください。

連載

学長の愛したフィールドの旅 オホーツク臨海研究センター篇

四季折々で美景を放つ能取湖畔
そこにオホーツク海洋研究拠点^{そび}が聳える



飼育水槽を活用した海洋水産資源の増殖研究



堂々たるホッコイシマエビ

【文・江口文陽(学長) 写真・阿部雄介】

灯台下暗し・知り得てその偉大さを実感

秋には、十数年前よりオホーツク海に通じる海跡湖である能取湖畔を訪れている。湖畔に点在するシラカンバの林床に発生する森の天使「ベニテングタケ」を観察するためだ。朝より点在して発生する子実体を撮影して

流水と海流が育む豊かな海域で展開される先端研究

本センターは、北海道オホーツクキャンパスから車で約20分の距離にあり、海洋水産学科をはじめとして、生物産業学部学生の水圏教育・研究および実験・実習に利用されている。特に臨海実習では、海の体験、生きた生物(クジラ・イルカ・アザラシや魚介類など)にふれながら行う実習が可能となっている。農学系のすべての大学が臨海施設を持っているわけではなく本学の学生は恵まれた環境で将に「総合農学」を学べるのである。本センターの周りには、能取湖のみならずサロマ湖、藻琴湖、濤沸湖といった環境の異なる海跡湖があり、冬には流水が流れ着くオホーツク海では、春から秋にかけては宗谷暖流、秋から春にかけては東樺太海流が勢力を強める。能取湖は、季節によりこれら性質の異なる水塊が流入し、冬

国際食料情報学部 国際農業開発学科
小塩 海平 教授
KOSHIO Kaihei

東京農大の研究者たち
Professor&Researcher

スギ花粉飛散防止を探究

1964年、日本で最初のスギ花粉症患者が日光で報告されてから60年が経つ。私がスギ花粉飛散防止剤の研究を始めたのは東京農大大学院に進学した1990年のことだ。ちょうど、「花粉症」の語が歳時記に載り、俳句の季語となった年であった。いまやスギ花粉症患者人口は5割に達しようとする勢いである。

薬剤散布で花粉激減

当初の構想は、人体や健康にやさしい天然物質由来のネバネバした物質を処理して花粉をからめとってしまおうというもので、「鳥もち作戦」と称していた。鳥もち、松ヤニ、澱粉糊、ゴム、アルギン酸(海藻のヌルヌル成分)、食用油など、思いつくままにスギの雄花に処理したところ、いずれも花粉を粘着させることは

はできなかつたものの、植物油を処理した枝では、花粉が入っている雄花ごと褐変・枯死するところがわかった。スギ雄花は、8月下旬〜10月上旬に油っぽい物質に遭遇すると、花粉母細胞の減数

分裂の過程でプログラム細胞死が引き起こされ、雄花ごと枯死していく。おそらく、正常な花粉を形成できなくなった時点で子孫の繁栄に携わらないほうがよいという自覚が生じるのだろう。花粉が作られなくなる一方、その分のエネルギーを幹の生長に回すことができ、材木としてのスギの



栃木県塩谷町の町有林で実施したスギ花粉飛散防止剤空散実験(2023年9月撮影)

価値が高まるという予想外のメリットがあることもわかってきた。2016年、食品添加物で構成された世界初のスギ花粉飛散防止剤の農業登録を完了し、2022年からは林野庁が推進する「スギを伐って使う」「少花粉・無花粉スギに植え替え

A2牛乳商品化へ



農学部 動物科学科 庫本 高志 教授

A2牛乳は、お腹がごろごろしにくい牛乳として世界的に注目されている。動物科学科の庫本教授は、2020年からA2牛乳の商品化に取り組んだ。しかし、そこにはいくつもの解決すべきハードルが待ち受けていた。例えば、A2牛乳を作るには、A2型βカゼインのみを含むミルクを出す牛が必要である。そのような牛を選ぶにはβカゼイン遺伝子の診断をしなければならない。さらに、搾られたミルクが一般的なミルクと混じることなく製品にならないといけない。ところが、当時、βカゼイン遺伝子の診断技術やミルク中のA2タンパク質を評価する技術はなかった。そこで、庫本教授は、富士農場、農大OBの牧場、日本A2ミルク協会、重井医学研究所などと協力し新しい技術を開発、2024年ついにA2牛乳の商品化を果たした。3月には、農大稲花小学校で「日本A2協会牛乳」が給食として提供された。東京農大の「実学」が、A2牛乳の商品化として結実した。

「東京農業大学STEAM教育講座」開始!

今日、高等教育の人材育成として、探究学習、文理融合の学び、STEAM教育の強化等が求められている。本学が展開する総合農学は、衣食住のみならず、健康、医薬、福祉、観光、国際貢献、地域振興等、多分野に関わる学際的な学問であり、様々な社会課題解決の可能性を秘めている。本学では、身近な社会課題に対し総合農学がどのように活用、実装されているかをSTEAM教育の視点から理解することを目的に、令和6年度より特別講義として「東京農業大学STEAM教育講座」を開講する。この講座が、受講する学生のキャリア教育や将来の教育者としての資質を養う一助となることを期待している。

【上岡美保】

News&opics ニュース&トピックス



第2回「東京農大SDGsコンテスト～未来への挑戦～」の最終審査が、昨年12月16日に横井講堂で行われた。選考に残った5名がプレゼンテーションを実施。最優秀賞には、山口県立田布施農工高等学校3年 小田公花さんの作品が輝いた。

SDGsコンテスト受賞作品決まる

2022年から始まった本コンテストは、今回で2回目。SDGs17の目標と東京農大が掲げる「学びのキーワード」から高校生が地域社会をより良くするために取り組んでいることを募った。応募は、全国43校から208作品。学内外からなる審査員の厳正な審査の上、各賞(11表)が贈られた。最優秀賞に輝いた小田さんは、「地域社会に必要なものは農業教育。将来は『未来を変える農業教員』になりたい」と発表した。【住友富美】

最優秀賞	「未来を変える、農業教員～夢とSDGsにつながるボランティア活動～」	小田 公花さん	山口県立田布施農工高等学校 3年
優秀賞	「不登校生と地域が結び付き農業の扉を開く」	眞鍋 結香さん	香川県・星槎国際高等学校 3年
	「環境保全と生産性向上に貢献できるヘラクレス堆肥の可能性」	佐々木 芽生さん	秋田県立大曲農業高等学校 2年
特別賞	「牛乳の有効活用方法」	高嶋 雄太さん	市立札幌旭丘高等学校 2年
	「SDGs.15 陸の豊かさを守る 三間町の濁水をきれいにした!」	薬師寺 晃久さん	愛媛県立宇和島高等学校 2年

※受賞時の在籍学年

東京農大の卒業生たち Alumni

この春、社会人となった2023年度卒業生にインタビュー



富士通株式会社入社
高槻 芳照さん
【食料環境経済学科卒】

言語化できないまま、進んでいく。チームは前に進んでいかなければならない。最初は拙い言葉だったが、少しずつ上達した手応えがあります。

大学4年間で得たものは、自分の思いを言語化する能力です。良くも悪くも私自身大変わがままな性格です。チームスタッフや部員に対し、もっとこうしたいと思うことは下級生の頃からありましたが、上手に伝えられませんでした。3年の箱根予選会後に主将になり、私の思いをいつまでも

農林水産省入省
永尾 和奏呼さん
【食料環境経済学科卒】



ようになりたいです。新入生にメッセージを。新しい生活を前に期待や不安で胸がいっぱいのことと思います。大学生活は楽しいことも辛いことも同じくらい割合です。卒業する時に若干でも楽しいことの方が多かったと思えるように日々を大切に過ごしてください。

食料環境経済学科を選んだ理由は、大学の理念に惹かれた。食料自給率について専門的に学べそうだったため進学しました。農大で一番の思いは、農業に熱い思いをもつ

全日本空輸株式会社入社
山本 翔太さん
【大学院農業工学専攻修了】



全日本空輸株式会社入社
山本 翔太さん
【大学院農業工学専攻修了】

後には食べたお母さんの料理が忘れられません。サークルで野菜を作ったり、全国各地で行った援農ボランティアの経験を活かして、農林水産省で現場目線からの農業政策について。農大で一番の思いは、農業に熱い思いをもつ

第6弾
マイタケ
舞茸、学名: *Grifola frondosa*

食べると思わず舞い踊ってしまうほど美味しいキノコ!

舞茸は身近なキノコだが、天然物となると中々お目にかかることは出来ない。10月頃にミズナラやクヌギなどの根元に自生し、香りも歯ごたえも良くなるともたまらないという。名前の由来は諸説あるが、食べると思わず舞い踊ってしまうほど美味しいことからだそう。食べ方は炒め物や天ぷらなど色々楽しめるが、タンパク質を分解する酵素が含まれているのでお肉と調理すると軟らかくなって美味しくなるという。いつものお肉も舞茸と一緒に舞い踊るようなディナーに変身させてみてはいかがかな。

【文・寺田守一 写真・江口文陽(学長)】

農友会活動

競技スキー部

舟山大陸さん「全日本学生チャンピオンズスキー大会」スプリント競技で優勝

第38回全日本学生チャンピオンズスキー大会(クロスカントリー)が、令和5年12月17日〜20日に北海道美瑛町で開催され、1.8kmスプリント競技において、舟山大陸(自然3年)が優勝を果たした。競技は、予選上位30名が決勝ラウンドに進む

ことができる。決勝ラウンドは1組6名で競い、準々決勝(5組)、準決勝(2組)、A決勝(1組)、B決勝(1組)からなる。舟山は21位で予選通過。その後、順調に駒を進めA決勝では優勝を勝ち取った。今年度、学生生活最後の年となるが、更なる活躍が期待される。



力走する舟山大陸さん(左から3番目)

【総監督 関大輔】

男子ラクロス部

地域貢献で受賞「ラクロスフロンティア賞」

昨年、小田急エージェンシー株式会社と共同で、経営駅隣接の商業施設(経堂コルティ)で児童を対象にラクロス体験会を開催した。初体験の子供たちは、ラクロス部員が手取り足取り教える

評価され、「私たちは開拓者だ。」という日本ラクロス協会の理念を体現したチームとして「Eastern Lacrosse Award(2023)」フロンティア賞を受賞した。ラクロス部は創立30周年を今年迎え、ラクロスを基盤にさらに積極的に地域貢献を行ってきたい。



経堂コルティでの体験会

【部長 大石祐一】